

「19世紀学」・ヨーロッパ・歴史学

—— オスターハンメル『世界の変貌：一つの19世紀史』を
手がかりに ——¹

森田直子

1. はじめに

「19世紀学」とは何か、これまでもいくつかの手がかりが提供されてきた²。論者により「19世紀学」理解に幅はあるものの、我々が拠って立つ知のあり方、すなわち19世紀のヨーロッパに由来する学問体系が現在大きく揺らいでいる、という意識が共通の前提にあるように思われる³。現代の知の体系の源泉を、19世紀のヨーロッパのみに求めるのは一面的に過ぎる。しかし、我々は「知や学問に携わる人」と聞けばまず「学者」を、「学者」と聞けば第一に「大学」や「研究所」などに職を持つ者を思い浮かべ、それらの機関では最先端の「知」や「学問」が追求され、その「教授」が行われていると考える。こうした現代的な知のシステムへの一般的理解が、19世紀のヨーロッパの知のあり方に大きく負っていることは首肯されるだろう。また、それが—— 価値判断は抜きにして—— 「揺らいでいる」ということは、大学制度が抱える昨今の様々な問題、各学問分野内部における諸葛藤などを想起すれば十分に納得されうる。したがって、「19世紀学」の出発点は、多くの者に共有されていると言えるだろう。

他方、「19世紀学」が何を研究対象とし、どんな目的を持つのか、つまり「19世紀学」研究の輪郭については、明確な共通性が示されているようには見えない。もっとも、これは必ずしも「19世紀学」の弱点ではなく、むしろ利点として受け止められるべきである。「19世紀学」、すなわち19世紀の学とは、19世紀のヨーロッパで確立したとされる個々の学科やその内部における思考・研究方法といったものから、学問の制度的枠組としての研究機関（その中心としての大学）やそれらに影響を与える国家や社会のあり方、さらには国境を越える普遍的な知識、思想体系までもを含意しうる。それゆえ、さしあたりは歴史学、教育学、経済学、文学、法学、哲学等々の既存の枠組—— その制度的基盤としての大学—— や、それぞれの学会の中に軸足を置きつつ、各自が「19世紀学」的な関心に基つき研究を推進することを可能にしているからである。「19世紀学」研究とは、そうした営みの結果として構築されていくものと考えられる。

本稿では、歴史学を専攻している立場から「19世紀学」の前提に検討を加え（第2節）、そも

¹ 本稿は、2011年1月20日開催の第5回新潟大学研究推進セミナーにおける口頭報告を元に行っている。報告への貴重な質問やコメントに感謝します。

² 参照：「19世紀学研究」第1号-、2008年-。

³ 参照：19世紀学学会設立趣旨（<http://www.isc.niigata-u.ac.jp/~globalstrategy/19rules.htm>）。

そも「19世紀」とは「いつ」のことで、「どこに」存在し、「どのような」時代であったのか⁴、つまり19世紀の歴史=19世紀史について、ドイツ人歴史家ユルゲン・オスターハンメル⁵の近著『世界の変貌：一つの19世紀史』を手がかりに考察し（第3節）、最後に、「19世紀学」研究への展望を示すことを試みる。

2. 「19世紀学」と歴史学

「19世紀学」は、既存の学問体系が19世紀のヨーロッパで基礎づけられたことを第一の前提とする。科学史の大家である村上陽一郎は、それを次のように分かりやすく説明した。「それまでは神学によって束ねられていたヨーロッパの哲学という学問体系が、18世紀啓蒙主義によって解体された。〔…〕19世紀に入って、学問はもう一回再編成をされなければならなくな〔り、…〕、その学問の解体の後始末のために19世紀があった〔…〕。それ〔=大切な19世紀の出来事〕は、個別科学の出現と、“ist”の出現という点に集約される。例えば動物学〔…〕という個別科学が発芽して〔原文ママ〕、そしてそれをやるための専門化としてのズオロジスト〔Zoolog“ist”〕が生まれる。⁵」それらは、大学の制度化や専門家の団体（=学会）の登場と結びつき、それまでの学問や知のあり方を変容させた。こうして出来上がった19世紀の学問一般の特徴は、それ以前の「神の秩序」や「自然の秩序」に対する意味で「人為的な秩序」の構築と表現でき、またそれは「民主化」のことである、と⁶。

西洋史学界の泰斗の遅塚忠躬は、そうした19世紀ヨーロッパにおける諸科学の確立の背景を「文化的風土」と仮称し、その特徴として5点（①イギリスの産業革命とフランス革命という二重革命の進展、②国民国家の成立、③資本主義的世界体制の確立、④人口の規則的増加と経済の規則的成長、⑤市民的公共圏の成立）を指摘した⁷。すなわち、「19世紀のヨーロッパでは、経済的には資本主義という形に編成された市民社会が成立し〔…〕、国民国家というかたちを取った国家がそれに対置され〔…〕、市民社会の自律性は、規則的で持続的な成長・発展によって担保され〔…〕、ピラミッド型の世界体制〔…〕のもとで、ヨーロッパの人々は、底辺諸地域もいずれは近代化するだろうという単線的発展の図式を信じ〔…〕、このような観念は、情報通信の発展によって、市民的公共の場に広く浸透した」ことを背景に、個別科学のディシプリン（方法的立場）が確立した。その際、「最も重要な契機は、第一に、国家と市民社会の分離（市民社会の自律性）の確認であり、第二に、社会（広くは歴史）の発展法則の認識」であって、そこで成立した諸科学のディシプリンは、ニュートン力学に代表されるような自然科学の

⁴ 19世紀が「どのような」時代だったかという疑問はさておき、「いつ」、「どこに」存在したかという問いは奇妙に思えるかもしれない。これについては第3節以下を参照。

⁵ 村上陽一郎「19世紀に何が起きたか——科学の視点から——」（『19世紀学研究』第1号、2008年、23-41頁）、30頁。村上は科学の成立する過程を19世紀半ばに設定している。参考：村上陽一郎「科学的事実論について」（『科学基礎論研究』Vol. 19-No. 4、1990年、1-4頁）。

⁶ 村上「19世紀に何が起きたか」、38頁以下。参考：村上陽一郎「19世紀西欧におけるデモクラシーの概念」（『19世紀学研究』第3号、2009年、37-40頁）。

⁷ 遅塚忠躬「19世紀と現代」（『19世紀学研究』第1号、2008年、4-22頁）、6-10頁。

ディシプリンをモデルとしていた、すなわち、自然法則の必然的貫徹という原理を持ち、偶然を排除し、神を排除するという特徴を持った、と⁸。

「19世紀学」の第二の前提は、こうして19世紀に確立したとみなされる諸科学や学問体系が、しばらく前から大きく揺らいでいるという我々の認識にある。遅塚は、この認識をトマス・クーンをひきながら次のように説明する。19世紀から現代までの間に、パラダイム転換という意味での科学革命は——少なくとも歴史学では——起こっていないが、今や旧来のパラダイムに依拠した「通常科学」がうまく機能せず、研究者たちがきわめて「不安定な状態」に置かれているのだ、と⁹。社会諸科学（とくに歴史学）におけるこの不安定な状態は、「マルクスの实在論とラプラスの魔との呪縛から解放され」た結果、事実の实在性が揺らぎはじめ¹⁰、さらには因果関係の自明性が疑問視され始めたことに顕著に表れているという¹¹。そして、「19世紀に確立した近代諸科学が、こんにち、一種のパラダイム転換を迫られていることだけは確か」であると結論づける¹²。

本稿も——パラダイム転換を見据える慧眼は持ち合わせていないものの——、19世紀的な諸科学およびそれを支える大学制度が、今日「不安定な状態」にあるという感覚を共有している。その感覚は、19世紀と現代では学問を取り巻く背景が大きく異なっているという単純な理由に支えられている。19世紀ヨーロッパの特徴が失われれば、その中から生じた諸科学やその体系が揺らぐのはむしろ当然であろう。したがって、19世紀ヨーロッパの特徴について、村上や遅塚の描く一般論から出発しつつ、より具体的に考察することは、「19世紀学」研究の核心として重要な意味を持つ。

その際、歴史学は幾重にも問題となりうる。なぜなら、19世紀ヨーロッパの特徴を把握する作業は主に歴史学の課題であり、同時に、科学としての歴史学も19世紀に成立し¹³、時代とともに揺らいできているからである。そして、厄介なことに、歴史学はそれが実践される時代や場所や主体によって、アプローチの仕方から分析結果にいたるまで強い影響を受けるからである。20世紀初頭のヨーロッパ人歴史家が描く19世紀ヨーロッパ像と、21世紀初頭のアジア人歴史家が描く19世紀ヨーロッパ像では、おそらくかなり異なったものになるだろう。だからといって、歴史家は、一つの19世紀ヨーロッパ像を提示するのは不可能であると仕事を放棄することも、19世紀ヨーロッパなどは実在しないといって自らの存在価値を否定することもできない。「19世紀学」の核心とも言える19世紀ヨーロッパの把握という難題は、果たしてどのように

⁸ 遅塚「19世紀と現代」、10-13頁。

⁹ 遅塚「19世紀と現代」、4頁。

¹⁰ 遅塚「19世紀と現代」、17頁。

¹¹ 遅塚「19世紀と現代」、20頁以下。

¹² 遅塚「19世紀と現代」、22頁。遅塚は続けて、「では、われわれの迫られているパラダイム転換によって、諸科学にどのような展望が開けるのか」という問いかけを「19世紀学」学会員に投げかける一方、遺著となった『史学概論』（東京大学出版会 2010年）において歴史学というディシプリンに関して一つの見通しを提示した。本号所収の書評も参照されたい。

¹³ 通常、「19世紀のヨーロッパから成立していったこの歴史学は、おもに文献史料、とくに公文書といえるような文献史料に依拠して、歴史的事実の確定を行い、それを基礎にして歴史的過去の変遷を明らかにしようという姿勢をはっきりさせたもの」（福井憲彦『歴史学入門』（岩波書店 2007年）、139頁）と理解される。

取り組まれるべきであろうか。

3. オスターハンメル『世界の変貌』

この問いに対し、ドイツ人歴史家ユルゲン・オスターハンメル（1952-）が著した大作『世界の変貌：一つの19世紀史』（2009年刊）は¹⁴、いくつかの手がかりを提供してくれるように思われる。そこで、本節では『世界の変貌』の概観を試みることにする。本書のテーマを一言で要約するならば、歴史の中の19世紀という時代をグローバルな視点から明らかにしようというもの、その意味での19世紀論となるだろう¹⁵。しかし、これはいわゆる理論書ではなく、豊富な事例で彩られた歴史叙述であり、19世紀史である。以下では本書の特徴を、便宜的に形式面と内容面とに分けて整理し——その際、イギリス人歴史家エリック・J・ホブズボーム（1917-）の19世紀史三部作を引き合いに出すことで、『世界の変貌』の特徴をより際立たせるように努める¹⁶——、オスターハンメルの19世紀史の要点を見ることにしたい。

3-1. 「長い19世紀」と「より長い19世紀」

形式面における『世界の変貌』の第一の特徴は、時系列に沿ったいわば垂直的な視角の放棄である。ホブズボームの19世紀史三部作は、各部の冒頭部分以外ではテーマごとの共時的記述が意図されているが、1789年から1848年を扱う第1部が1962年に、1848年から1875年までの第2部が1975年に、そして1875年から1914年までの第3部が1987年に出版されたことから分かるとおり、最終的には時間軸に収斂する性格を持つと言える。対する『世界の変貌』は、同じく三部構成（それぞれは3章、8章、7章）を取り¹⁷、各章においては必要に応じて通時的記述がなされるが、部や章の配列自体は時間的規則を全く持たない。このことは、オスターハンメルの19世紀論が、単線的な唯物史観や単純な近代化論はもとより、ある世界の成立や一方向の歴史発展を追究するものではないことを裏付けている。と同時にそれは、タイトルが暗示する

¹⁴ Jürgen Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt: Eine Geschichte des 19. Jahrhunderts*, München 2009. 本書に付された著者紹介は以下の通り。「ユルゲン・オスターハンメルはコンスタンツ大学の近現代史講座の教授。18世紀以降のヨーロッパ史、アジア史に多数の業績有り。C・H・ベック社〔本書の出版社〕から出版されているのは、『中国と世界社会』（1989年）、『アジアの脱魔術化』（1998年）、『コロニアリズム』（2006年）および『グローバル化の歴史』（N・P・ペーターソンと共著、2007年）。」

¹⁵ 参照：「私が具体的に説明したいと思うのは、切り離されて自己充足した19世紀ではなく、より長いタイムラインに一つの時代がはめ込まれていること、すなわち歴史の中の19世紀である。」（Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 87.）

¹⁶ Eric J. Hobsbawm, *The Age of Revolution: Europa 1789-1848*, London 1962; *The Age of Capital 1848-1875*, London 1975; *The Age of Empire 1875-1914*, London 1987（全て邦訳あり）。ホブズボーム自身、これらは当初から単一のプロジェクトとして意図されたものではないとしつつも、「この三部作は世界史における19世紀についての概観」と言い（参照：野口建彦、野口照子 訳『帝国の時代 1875-1914（1）』（みすず書房 1993年）、15-16頁）、オスターハンメルもホブズボームの「19世紀史三部作」を意識していることから（Vgl. Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 17）、両者の対比は正当化されうる。

¹⁷ 部と章の見出しは次の通り。第1部：接近（「記憶と自己観察」、「時間」、「空間」）、第2部：パノラマ（「定住と移動」、「生活水準」、「都市」、「フロンティア」、「帝国と国民国家」、「権力システム、戦争、インターナショナルイズム」、「革命」、「国家」）、第3部：テーマ（「エネルギーと産業」、「労働」、「ネット（ワーク）」、「ヒエラルヒー」、「知」、「文明化」と排除、「宗教」）。

ように、経時的变化よりも空間的連関を重視した一システム論の構築を主眼とするものでもない。著者オスターハンメルが目指すのは、豊富な資料に裏打ちされた解釈という意味での「時代のポートレート Epochenportrait」の提示なのである¹⁸。

そのために用いられる手法が、『世界の変貌』の形式面での第二の特徴をなす。すなわち、オスターハンメルは、19世紀の世界についての巨大な肖像画あるいは肖像写真のイメージを読者に提供することに努める。とりわけ第二部——本文約1300頁(!)のうち700頁以上を占める——では、「現実世界の『パノラマ』を展開する aufrollen (巻いてあるものを広げるというのが原義)」ことが目的だと明言されている¹⁹。そして、それを実行するために彼が利用するのは、歴史家が通常依拠する一次史料、当時の人々が残した様々な証言や同時代の絵画や写真ではなく、信頼に足る二次文献に基づいた自身の言葉、文章、論理の力(のみ)である。『世界の変貌』には、同時代人の言葉が全く引用されていないわけではないが²⁰、いくつかの表を除く視覚資料は本文中にただの1枚も見出せない²¹。ホブズボームの19世紀史が、図像や地図を三部併せて200枚以上掲載し、各章の冒頭に同時代人の言葉を印象的に掲げているのとは好対照である。オスターハンメル自身も指摘するとおり、19世紀には自己観察とその表現——記録や記憶媒体、ルポルタージュや日刊紙、統計や写真など——が飛躍的に増大し²²、その時代に関する一次史料には事欠かないように思われる。にもかかわらず、それらが19世紀のポートレートを描く際に用いられていないのは、著者の明確な意図と理解されるべきである。つまり、オスターハンメルは、あくまで非同時代人としての高みから全景を俯瞰しようとするのである。その際、例えば「自己観察」の記録としてのルポルタージュは、世界に万遍なく存在したわけではなく、仮に存在したとしても、同程度に利用できなければ見方に偏向が生じる。彼は、同時代人による記録全般に寄り添う姿勢を意識的に回避することで、中立性のより高い、統一感のあるパノラマ絵巻物の展開に努めていると言えよう。

『世紀の変貌』の形式に関する第三の——おそらく最も注目に値する——特徴は、19世紀の始点と終点の捉え方にある。クロノロジカルな叙述が放棄されているとはいえ、本書は副題が示すとおり19世紀の歴史を扱うものであり、19世紀とはいつのことかという時期区分や時代概念の問題を素通りするわけにはいかない²³。オスターハンメルは、第1部第2章でこの問題を

¹⁸ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 16.

¹⁹ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 21.

²⁰ 著名なアメリカ人ドイツ近代史家スパーバによれば、『世界の変貌』では——正確かどうか疑問が残るが——、トマス・ペインとレーオポルト・フォン・ランケが各1回、マックス・ヴェーバーの言葉が2回引用されているだけだという。参照：Jonathan Sperber, Review of Osterhammel, Jürgen, *Die Verwandlung der Welt: Eine Geschichte des 19. Jahrhunderts*. H-German, H-Net Reviews, June, 2010.

²¹ 本体を保護するための——したがって、簡単に取り外すことのできる——カバーには、イギリスの風景画家J・M・W・ターナー(1775-1851)の「雨、蒸気、スピード：グレート・ウェスタン鉄道」が印象的に用いられているが、これが本書に見られる唯一の図版である。

²² Vgl. Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 25-83.

²³ 歴史学にとっての時期区分の問題を、「世紀」概念について扱ったものとして以下を参照：森田直子「歴史における『世紀』」(『19世紀学研究』第1号、2008年、141-154頁)。「(キリスト紀)年」に焦点を当てて歴史学を考えるものとして：佐藤正幸『世界史における時間』(山川出版社2009年)。

正面から扱う²⁴。結論から言えば、彼の19世紀は、1760年代から1920年代までをカバーする。つまり、『世紀の変貌』では、カレンダー上の19世紀より50年以上長い期間が19世紀とみなされるのである。さしあたりこれを、1789年のフランス革命勃発から1914年の第一次世界大戦勃発にいたる「長い19世紀」に対する、「より長い19世紀」と名付けておこう。前者は、他ならぬホブズボームの19世紀史を一つの理論的支柱とし、とりわけ大陸ヨーロッパに関心の強い歴史家たちによって好んで使われている概念である²⁵。オスターハンメルはそれを踏まえつつも、フランス革命の存在自体が東アジアや太平洋地域、アフリカ南部などでは長い間知られていなかったこと、第一次世界大戦の勃発そのものの衝撃は限定的であったことなどを指摘し、グローバルに妥当する画期的年号を挙げることを断念する。その代わりに、「より長い19世紀」を3つの時代概念（「はざま期 Sattelzeit」、「ヴィクトリアニズム」、「世紀末 Fin de Siècle」）を用いて把握しようと試みる²⁶。

「はざま期」とは、「近世」と「近代」のはざま（＝鞍部 Sattel）、すなわち1760/70年代から1830年代にかけての時期をさす。これは、この時期にヨーロッパでは社会・政治的な用語（＝基本概念）が、それまでの古い意味合いから現代に通じる新しいものへと変化したという認識を前提に、ドイツ人歴史家ラインハルト・コゼレック（1923-2006）によって生み出された時代区分概念である²⁷。オスターハンメルは、これがグローバルな時代区分として有効であることを、7つの理由（①英・露・仏帝国の強大化／米大陸での分離独立の達成／オスマン帝国や中国の膨張停止などの力関係の変化、②「白人」の地位の強化、③我々意識を強化する「ナショナリズム」の登場、④政治史的には合衆国を除いた貴族支配もしくは独裁政治の最終局面、⑤社会史的には従来の社会的ヒエラルヒーへの疑義の高まり、⑥経済史的には産業革命の本格的展開前の危機をはらんだ過渡期、⑦ヨーロッパ規模での文化的転換点としての1830年）から説明する²⁸。19世紀はこの「はざま期」に始まり、1880年代から1920年代にかけての「世紀末」あるいは「世紀転換期 die Jahrhundertwende」に終息していく、という。「世紀末」という概念にも、オスターハンメルは7つのグローバルな特徴（①石炭・石油による従来エネルギーの凌駕、②工業化の地理的な拡大／「第二次産業革命」の進展／「独占資本主義」への移行、③全大陸を

²⁴ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 84-128. この章のタイトルは「時間」であるが、「19世紀はいつだったのか？」というサブタイトルのもと、「クロノロジーと時代の特徴」、「カレンダーと時期区分」、「転機と過渡期」、「はざま期・ヴィクトリアニズム・世紀末」、「時計と加速」の5節によって構成される。ドイツ近代史の大家ユルゲン・コッカは、有力紙『デー・ツァイト』に寄せた書評で、「時期区分と空間の歴史に関する節は、本書の最善の部分」と評価している（Jürgen Kocka, *Die erste Globalisierung. Ein großer Wurf: Jürgen Osterhammels Weltgeschichte des 19. Jahrhunderts*, in: *DIE ZEIT*, 21.02.2009, Nr. 9）。なお、オスターハンメルは本書の最後で再度「より長い19世紀」について簡潔にまとめている（Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 1284 ff.）。

²⁵ 参照：森田「歴史における『世紀』」、150-153頁。

²⁶ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 95-104.

²⁷ Vgl. Reinhart Koselleck, *Einleitung*, in: O. Brunner, W. Conze u. R. Koselleck (Hg.), *Geschichtliche Grundbegriffe*, Bd. 1, Stuttgart 1972, 2004, S. XIII-XXVII. なお、ホブズボームの19世紀史の第一部も、“industry”, “middle class”, “capitalism”, “socialism”, “railway”, “nationality”, “engineer”, “journalism”, “pauperism”等の英単語が、18世紀末から19世紀前半にかけて創造されたり、近代的な意味を得たりした、という指摘から始められる（参照：安川悦子、水田洋訳『市民革命と産業革命：二重革命の時代』（岩波書店 1968年）、3頁）。

²⁸ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 104-109.

結ぶ経済・通信網の成立、④帝国主義的膨張・植民地支配の強化、⑤各国における政治支配秩序の固定化と福祉国家の芽生え、⑥ヨーロッパ規模の芸術の刷新と世界規模でのジャーナリズムの展開、⑦西洋外での批判的自己省察の高まり／新しい抗議運動の展開）を挙げ、さらに、1900年を境とする前後20年間に、多くの国や地域において軍事的敗北（中国、スペイン）、列強による分割（アフリカ）、革命（ロシア、イラン、オスマン帝国、ポルトガル、メキシコ、中国）などの大変革が起こり、画期がもたらされたことを指摘する²⁹。そして、「はざま期」と「世紀末」に挟まれた「本来の19世紀」には、「ヴィクトリアニズム」という概念——言うまでもなく、ヴィクトリア女王（在位1837-1901）に由来するイギリス史用語——を適用する。その理由は、オスターハンメルによれば、この概念には当時の世界におけるイギリス帝国の並外れた経済・軍事力が反映されており、相対的に定評のある時代概念とみなしうるからだという³⁰。

3-2. ヨーロッパとグローバル・ヒストリー、ヨーロッパのグローバル・ヒストリー

『世界の変貌』の内容面での最大の特徴は、19世紀＝「より長い19世紀」の捉え方にも表れているとおり、グローバルな視点の強調、グローバル・ヒストリーの実践と言えるだろう。オスターハンメルは、本書の序論を「全ての歴史は世界史となる傾向を持つ³¹」という一文で書き始め、「19世紀は自らのグローバル化を反映している³²」とも言う。もちろん彼は、歴史学が19世紀に学問として、すなわち、その手続きの合理性が跡付け可能な科学として成立した際、現実的な観点から世界史は遠ざけられたこと³³、歴史学は今でも範囲の限られた事例を徹底的に掘り下げる作業を欠かせないこと、そして全ての歴史家が世界史家になる必要はないことを認めている。また、歴史学の専門化が進んだ結果、歴史的発展などの大きな問いをめぐる「ビッグ・ヒストリー」は、社会学者や政治学者に委ねられることになり、ポストモダン思想の影響により長期的なプロセスの解釈や「大きな物語」が基本的に不可能になったとみなす者がいることにも理解を示す。「にもかかわらず[···]、世界史は、歴史叙述の一つの可能性、いわば、折々に試してみなければならぬ一つの音栓 [= 音色や音域を変化させるためにパイプオルガンなどについているストップ] である³⁴」、とされる。

このように、『世界の変貌』は19世紀を対象にしたグローバルな歴史叙述を目指すものであるが、その意義を十分に評価しうるには——やや本筋から逸れるように思われるかもしれないが——、最近の「グローバル・ヒストリー」について一瞥を与える必要がある。20世紀末、とりわけ21世紀に入ってから喧伝されるようになったグローバル・ヒストリーは、理念面におい

²⁹ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 109-114.

³⁰ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 103.

³¹ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 13.

³² Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 14.

³³ 19世紀に成立した科学的としての歴史学の祖とされるドイツ人レーオポルト・フォン・ランケ（1795-1886）も、1869年に「普遍的な世界史は不可欠であるが、不可能である；今日行われているような研究水準においては」と認めた（Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 1279）。

³⁴ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 14 f., hier S. 15.

でも実践面においても「世界史」とは少し様相を異にするようだ³⁵。日本におけるグローバル・ヒストリーの旗手の一人である水島司の整理に拠れば、グローバル・ヒストリーの興隆の背景は、①ソ連解体を経た1990年代以降の急速なグローバル化の進展、②東アジアからアジア全域に広がる急速な経済成長（西欧に対するアジアの意義の相対的高まり）、③歴史学の「袋小路」からの活路としての魅力、④外国史としての地域研究や地域史の成熟の結果としての新たな理論の模索、にあるという³⁶。こうして登場してきたグローバル・ヒストリーの特徴は、①扱う時間の長さ、②対象となる空間の広さ（特定の大陸や海域全体など）、③従来の歴史叙述の中心にあったヨーロッパ世界の相対化、④諸地域間の相互連関、相互影響の重視、⑤従来の歴史学がほぼ等閑視してきた対象やテーマ（疫病、環境、生活水準など）を扱う、ということに見出せるようだ³⁷。注意すべきは、新しいグローバル・ヒストリーが、19世紀ヨーロッパ生まれの歴史学へのアンチ・テーゼとして、合衆国やアジアを中心に発展してきた、とみなされていることである。つまり、西洋中心の「世界史」的発想に対し、東洋のプレゼンスの高まりを背景に挑戦するのが「グローバル・ヒストリー」である、と³⁸。

それでは、ヨーロッパにおいては「グローバル・ヒストリー」はマイナーかと言うと、そうではない。冷戦終結後の急速なグローバル化やアメリカにおける歴史学の新しい動向に敏感に反応し、1990年頃からグローバル・ヒストリーに正面から取り組む姿勢が見られる³⁹。ドイツでも「世界史 Weltgeschichte」に加え、「グローバル・ヒストリー Globalgeschichte」という表現を利用しながら、この新しい傾向が受け入れられ始めている⁴⁰。それを、ここでは2007年に出版された『グローバル・ヒストリー：理論、アプローチ、テーマ』の概説に依拠してごく簡単に要約しておきたい⁴¹。まず、著者たちは最近のグローバル・ヒストリーへのアプローチとして、①世界経済と世界システムの研究、②文明の比較分析、③グローバル化過程の歴史研究、④ポ

³⁵ 参照：岡崎勝世『世界史とヨーロッパ：ヘロドトスからウォーラーステインまで』（講談社現代新書 2010年）。「世界史研究所」の活動も参照（www.npo-if.jp/riwh/index.html）。

³⁶ 水島司「グローバル・ヒストリー研究の挑戦」（同編『グローバル・ヒストリーの挑戦』（山川出版社 2008年、2-32頁）、2-4頁）。

³⁷ 水島司『グローバル・ヒストリー入門』（山川出版社 2010年）、2-4頁）。

³⁸ 日本では、大阪大学がグローバル・ヒストリー研究を組織的に推進している（参照 <http://www.globalhistoryonline.com/>）。本文に関連して、とくに以下が重要：羽田正「新しい世界史とヨーロッパ史」（『パブリック・ヒストリー』第7号、2010年、1-9頁）；秋田茂「グローバルヒストリーの挑戦と西洋史研究」（『パブリック・ヒストリー』第5号、2008年、34-42頁）；『思想（特集：グローバル・ヒストリー）』No. 937（岩波書店 2002年）；川勝平太編『グローバル・ヒストリーに向けて』（藤原書店 2002年）。

³⁹ 一例として、1991年にドイツのライプツィヒにグローバルな歴史研究の推進を目指して創設されたカール・ランプレヒト協会が、2002年から、グローバル・ヒストリーの推進役であるアメリカの世界史協会 World History Associationの支部として「ユニバーサル・ヒストリーとグローバル・ヒストリーのためのヨーロッパ・ネットワーク ENIUGH」へと拡張し、少なくともドイツ、イギリス、フランスにおけるグローバル・ヒストリー研究の一つの中心となっていることが挙げられる（参照：<http://www.uni-leipzig.de/~eniugh/>）。以下も参照：ヴォルフガング・シュヴェントカー「グローバリゼーションと歴史学：グローバルヒストリーのテーマ・方法・批判」（『西洋史学』224号、2006年、1-17頁）。

⁴⁰ Vgl. Matthias Middell, Universalgeschichte, Weltgeschichte, Globalgeschichte, Geschichte der Globalisierung – ein Streit um Worte? in: M. Grandner, D. Rothermund u. W. Schwentker (Hg.), *Globalisierung und Globalgeschichte*, Wien 2005, S. 60-82. オスターハンメル自身は、「世界史」と「グローバル・ヒストリー」を術語として区別はしていない。

⁴¹ Sebastian Conrad und Andreas Eckert, *Globalgeschichte, Globalisierung, multiple Modernen: Zur Geschichtsschreibung der modernen Welt*, in: S. Conrad, A. Eckert, u. U. Freitag (Hg.), *Globalgeschichte: Theorien, Ansätze, Themen*, Frankfurt am Main 2007, S. 7-49.

ストコロニアル研究、の4点を挙げる。そして、その研究の特徴として、①対象とする時代は16世紀以降が中心、②対象とする空間は世界全体ではなく、特定の地域のグローバルな相互関連に注目、③ヨーロッパ中心主義との対峙、④歴史の行為者または主体的行為（エイジェンシー）への関心、を指摘する。水島による上記の整理とは部分的にはかなり乖離するが、それは誤解に由来する矛盾などではなく、グローバル・ヒストリー自体がグローバルな同質性を持たず、それが行われる国・地域の学問的関心や伝統と大きく関わって展開されているという彼らの説明を、裏面から支えるものとして理解されるべきであろう⁴²。

また、彼らの見解に従えば、「〔グローバル・ヒストリー研究にかかわる〕諸組織、フォーラム、議論などはこれまで通り『西洋』のもの」であり、「西洋」の中でもとりわけグローバル・ヒストリー研究が制度的基盤を得て組織的に展開されているアメリカと、「帝国史」研究の長い伝統を持つイギリスが推進役とみなされる一方、ドイツでは、外国地域研究が歴史学部から切り離されており、伝統的に自国史への問いが中心であるため、グローバル・ヒストリー研究は困難であるという⁴³。しかし、そこで、国際的にも評価されうる重要な研究を行っている数少ない例外として、オスターハンメルの名前が挙げられる⁴⁴。彼は、イギリス帝国史に関する博士論文を、近代の中国と国際社会に関する教授資格論文を執筆し、西洋と東洋の大帝国とその植民地への眼差しから、コロニアリズムの歴史研究の第一人者とみなされてきた⁴⁵。先の指摘にもあるとおり、他のヨーロッパ諸国同様、ドイツでもコロニアリズム研究（ポストコロニアル研究）はグローバル・ヒストリー研究と密接に関連している⁴⁶。要するに、オスターハンメル『世界の変貌』は、ドイツ／ヨーロッパのグローバル・ヒストリー研究のただ中から生まれた作品であり、上述の特徴を併せ持つグローバル・ヒストリーの実践例なのである⁴⁷。

ホブズボームの19世紀史も、決してヨーロッパに対象を限定しているわけではない。必要に応じて非ヨーロッパ地域（オスマン帝国、インド、ラテン・アメリカ、アフリカ、中国、日本など）への言及も十分に見られる。その一方で、『世界の変貌』もヨーロッパ人がヨーロッパ人を第一の読者と想定して執筆したという点で、ホブズボームの著書と同類である。にもかかわ

⁴² Vgl. Conrad u. Eckert, *Globalgeschichte, Globalisierung, multiple Modernen*, S. 41-49. 著者たちによれば、すでに19世紀末からの近代化過程において世界史研究が重要な役割を果たしてきた日本では、グローバル・ヒストリー研究は歴史研究のアプローチを多様化することに寄与し、また、ヨーロッパ中心の世界史に対して東アジア圏を復権させ、西欧の文明化に対して日本の文明への立ち戻りを唱える立場を強化した、という。

⁴³ Conrad u. Eckert, *Globalgeschichte, Globalisierung, multiple Modernen*, S. 42.

⁴⁴ *a. a. O.*

⁴⁵ 定評のあるベック・シリーズ（C・H・ベック社のペーパーバック叢書）の一冊として出版されたオスターハンメル『コロニアリズム：歴史、形態、結果』（註14参照）は、英語、アラビア語、日本語（石井良訳『植民地主義とは何か』（論創社 2005年）訳者は歴史家ではないことに留意）、韓国語に翻訳されている。

⁴⁶ Conrad und Eckert, *Globalgeschichte, Globalisierung, multiple Modernen*, S. 22 ff.; Sebastian Conrad, *Deutsche Kolonialgeschichte*, München 2008. ドイツのコロニアリズム研究は、1970年代半ば頃から下火にあったが、1990年代以降のグローバル化の進展と共に再び活況を呈するようになったという（S. 7-14）。

⁴⁷ オスターハンメルは、ドイツにおけるグローバル・ヒストリー研究の第一人者として2006年に来日し、大阪大学のグローバルヒストリー・ワークショップ（註38参照）と東京大学のDESK（ドイツ・ヨーロッパ研究センター）で「文明化」をキーワードに講演した。Vgl. J. Osterhammel, *Approaches to Global History and the Question of the "Civilizing Mission"* (Global History and Maritime Asia Working and Discussion Paper Series, Working Paper No. 3, pp. 1-29).

らず、ホブズボームの著はヨーロッパ史、オスターハンメルは著はグローバル・ヒストリーとみなされるのは、後者ではヨーロッパ外の世界——とりわけ、中国についてオスターハンメルならではの目配りが見られる——への言及が格段に多いからというだけではない。前者が一貫してヨーロッパから世界を眺めるのに対し、後者はヨーロッパの外からヨーロッパを見るという視点を積極的に取り入れているからである。

このことを、19世紀ヨーロッパの特徴を構成する、①ブルジョワジー／市民層、②革命、③国民国家、の3点について見てみたい。最初の点に関して、ホブズボームの19世紀史は、「ブルジョワジー bourgeoisie」を一つの重要なキーワードとする。彼は、「資本の時代」と命名する19世紀中葉（1848-1875）の時期について、「ブルジョワジー」は、「その経済的定義、政治的定義そして社会的定義はいくぶん相違しているが、比較的小さい問題しか生まれないほどに接近していた」階級であり、具体的には、自由主義的な政治傾向を持ち、伝統的な出生（身分）ではなく個人の力で社会的地位を獲得し、共通の価値観や行動形態を持つ資本家、実業家、財産所有者、自由な専門職、（人数的には少ないが）高級行政官などのこととみなす⁴⁸。そして、こう言う。「もしこの時代の基本的動因を代表したものが資本主義でなく、ブルジョアジーによってブルジョアジーのために作られた世界でなかったとするならば、他に何が挙げられようか」、と⁴⁹。なお、ドイツ史でも、留保つきながら、19世紀は「市民層 Bürgertum⁵⁰の時代」と言われる⁵¹。19世紀ヨーロッパにおけるブルジョワジー／市民層の意義全般は否定できない。だからこそ、ホブズボームがブルジョワジーをヨーロッパの資本主義の勝利と結びつけ、彼の19世紀史のキーワードの一つとするのは、ヨーロッパ中心主義の体現とみなされても仕方のないことなのである。それに対して『世紀の変貌』では、市民層は、「ヒエラルヒー：社会空間における垂直線」という標題のついた比較的短い章で取り上げられるに過ぎない。そこでは、まず19世紀ヨーロッパについて言われる「身分制社会から階級社会へ」という社会史的シェーマが、ヨーロッパ以外には当てはまらないことが明らかにされる。それでも、19世紀のグローバルな社会的ヒエラルヒーを概観するため、「さしあたりヨーロッパの視点から選ばれた二つの例、すなわち貴族と市民層を手がかりに」する、と断りがなされる⁵²。その上で、ヨーロッパの市民 Bürger や市民社会の独自性が、最近の研究成果を踏まえながら簡潔に説明される一方、「リスペクタビリティ（＝市民的価値基準としての世間体）」や「中間層 middle class」といった英語の概念が援用され、ヨーロッパ外へと視野が広げられ、そこに「市民らしきもの（準市民）Quasi-Bürger」が存在したことが跡づけられる。そして、ヨーロッパの市民と、ヨーロッパ外の「市

⁴⁸ 松尾太郎、山崎清 訳『資本の時代 1848-1875 (2)』（みすず書房 1982年）、342-350頁。

⁴⁹ 『資本の時代 1848-1875 (2)』、354頁。

⁵⁰ ドイツ語では、「ブルジョワジー」に相当する単語は市民層 Bürgertum とされるが、もちろん、ニュアンスの差もある。明快な概説として、例えば以下を参照：ユルゲン・コッカ／松葉正文、山井敏章 訳『市民社会と独裁制：ドイツ近現代史の経験』（岩波書店 2011年）、7-15頁。

⁵¹ Vgl. Jürgen Kocka, *Das lange 19. Jahrhundert: Arbeit, Nation und bürgerliche Gesellschaft*, Stuttgart 2001, bes. S. 98-137; 森田「歴史における『世紀』」、151-153頁。

⁵² Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 1056-1064, hier S. 1064.

民らしきもの」とが比較対照され、前者（とくに資本家や企業家といった意味での）に比べ、後者は国家に保護される度合いが強く、政治的な自己主張をすることがほとんどなかった、という差異が示される。と同時に、市民にせよ「市民らしきもの」にせよ、いわば社会的ヒエラルヒーの中間に位置する層は、19世紀の間に世界中で相対的な重みを増し、それぞれの「市民的」価値基準——必ずしも西洋の文化的前提とは結びつかない——に従い、「近代的 modern」であろうとした点においては共通していたことも指摘される。グローバルに見れば、彼らは19世紀の過程で確かに興隆したが、彼らの世界観や生活様式が勝利したとまでは言い切れない、と言えるようだ⁵³。

第二に、19世紀ヨーロッパ史においては一大焦点とされる1848/49年の諸革命——「現代史の幕開け」とも称される⁵⁴——の位置づけに注目したい。ホブズボームの19世紀史では、第一部が「革命の時代」（邦訳は「市民革命と産業革命：二重革命の時代」）であり、第二部、第三部の冒頭の標題がそれぞれ「革命序曲」と「革命百周年」であることにも見て取れるように、革命一般が19世紀史を貫く一つのモチーフとなっている。彼は、1848年の諸革命については、それが成功しなかったものと認めた上で、「近代世界の歴史の上で、[...] これほど急速・広範に、国境を越え、諸国を駆けめぐり、大海原をも越え、あたかも燎原の火のごとく広まった革命は、一つとしてみられ」ず、「潜在的には最初のグローバルな革命」であり、「革命家たちがこれ以後夢見るところとなった [...] 『世界革命』のいわば範例」と重要視するが⁵⁵、それは彼がマルクス主義者であるという理由のみに還元されるべきではないだろう。『世界の変貌』においても、「革命：フィラデルフィアから南京を経てサンクト・ペテルブルクまで」と題された19世紀の諸革命を扱う章が設けられている⁵⁶。オスターハンメルは、革命概念を整理しながら、「1800年と1900年とに挟まれたカレンダー上の19世紀は、一般的な革命史の物語において第一級の意味を持たない」、「19世紀はヨーロッパにおいて諸革命の時代と言うよりは反逆的な時代、あちこちで見られたものの、国の政策の舞台でまとまることのほとんどなかった抗議行動の時代」であったとする⁵⁷。革命として空前の意義を担うのは、政治的近代の開始を告げる18世紀後半のアメリカ独立革命とフランス革命⁵⁸、そして、「世界革命」の先陣を切る20世紀初頭のロシア（第二）革命であって、例えば19世紀中葉の革命的諸事件——著者がそれぞれ同程度の頁数を割いて取り上げるのは、ヨーロッパの1848/49年革命、1850/51年に始まる中国の太平天国の乱、1857-1859年のインド大反乱、1861-1865年の南北戦争の4つ——は、「痙攣 Konvulsionen」であるという。1848年革命は、「19世紀のヨーロッパにおいて、最も参加した人が多く、

⁵³ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 1079-1104.

⁵⁴ 参照：河野健二『現代史の幕開け：ヨーロッパ1848年』（岩波新書 1982年）。

⁵⁵ 柳父閑近、長野聡、荒関めぐみ 訳『資本の時代 1848-1875 (1)』（みすず書房 1981年）、12-13頁。

⁵⁶ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 736-817.

⁵⁷ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 740.

⁵⁸ オスターハンメルは、ホブズボームのいう「二重革命」のテーゼはもはや有効ではないとする。政治的近代の幕開けとなる革命が偉大な文書（アメリカの独立宣言と合衆国憲法、フランスの人権宣言）を生み出したとき、イギリスの産業革命はまだ革命的な作用をもたらしておらず、18世紀後半の「環大西洋革命」は工業化の社会的対立に起因するものではないからである（Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 776 f.）。

地理的に最も大きな広がりを持ち、最も暴力的な政治的運動⁵⁹」であったとはいえ、とりわけ、当時のヨーロッパ地域と外の地域とを結びつける役割を担っていたイギリスとロシアでは、革命的諸事件はほとんど起こらず、植民地における政治的急変動につながることもなかったため、それは「グローバルな出来事ではなかった⁶⁰」、と。

第三に、おそらく最も論議的になるとと思われる国民国家の意義について。「[···] 19世紀には、国内に暮らす人びとを国民として育成して、彼ら自身に国民としての自己認識をうながし、法のうえからもシステムとしても統一的な国家体制を、いかにして政治的にも経済的にも構築できるかが、重要な課題とされた。19世紀のヨーロッパが、国民国家の時代といわれるゆえんである⁶¹」という一般的説明は、ほとんど疑う余地がないだろう。ホブズボームの19世紀史では、さらに、「ヨーロッパの外でも、国民国家の建設は劇的であり目をうばうものがあった。南北戦争はアメリカの国家的統一を分裂から守ろうとした試み以外の何だっただろうか。明治維新は日本における、新しくかつ誇り高い『国家』の登場以外の何だっただろうか。ウォルター・バジヨット（1826-77年）が『国民国家の形成』と呼んだ事態が世界中で生じており、この時代の支配的特徴をなしていることは否定すべくもなかった」という指摘も見られる⁶²。ホブズボームは、ネイションやナショナリズム研究の大御所でもあり、「19世紀特有の現象といえる『国民国家』がネイションという想像された共同体を創造したという議論を積極的に展開してきた⁶³。オスターハンメルも、こうした既存の研究成果を否定することはなく、「国民国家というのは西欧の比較的新しい発明品であり、その発生をほとんど実験室の条件下で19世紀に見て取ることができる」という⁶⁴。とりわけ、19世紀は「ナショナリズムの時代」、「国民国家形成の時代」であるとし、19世紀に成立した国民国家群をその形成過程により、①革命による独立（ラテン・アメリカ諸国、ギリシャ、ベルギー、バルカン諸国）、②覇権の統一（ドイツ、イタリア）、③発展的自立化（スウェーデン、ノルウェー、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ）、という三種に分類し、これらに当てはまらない独自の道を歩んだ例として日本とアメリカ合衆国、そして旧海上帝国の寂れた中心としてスペインとポルトガルを取り上げる⁶⁵。しかし、19世紀には、アフリカ大陸は言うまでもなく、日本とタイを除くアジア地域の多くの国は、国民国家を形成するどころか、その自立性を奪われていった。したがって、19世紀は「国民国家の時代」とは言えない。19世紀の世界の大半を覆い、つまりは当時の大半の人々を包括した政治秩序の単位は「帝国 Imperium」であり、19世紀は「帝国の時代」なのであった、と。そ

⁵⁹ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 778.

⁶⁰ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 781.

⁶¹ 福井憲彦『興亡の世界史：近代ヨーロッパの覇権』（講談社 2008年）、261頁。

⁶² 『資本の時代 1848-1875（1）』、117頁。ただし、引用文中の「国民国家」もしくは「国家」の原語は nation であり、バジヨットの言葉も「nation-making」である（Hobsbawm, *The Age of Capital*, London: Abacus 1977, p. 105）。

⁶³ 引用は：『帝国の時代 1875-1914（1）』、210頁。「国民国家」の原語は 'nation-state' である。以下も参照：E・J・ホブズボーム／浜林正夫、嶋田耕也、庄司信 訳『ナショナリズムの歴史と現在』（大月書店 2001年）；E・ホブズボーム、T・レンジャー 編／前川啓治、梶原景昭 訳『創られた伝統』（紀伊國屋書店 1992年）。

⁶⁴ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 581.

⁶⁵ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 580-603.

して、「帝国」の概念から諸経験にいたるまで、国民国家についての3倍近い長さで詳述し、19世紀における「ナショナリズム」や「国民国家形成」を過度に重視する姿勢に警告を発する⁶⁶。

もちろん、オスターハンメルのようなこうしたグローバルな視点に批判を加えることは、そう困難ではない⁶⁷。しかし、ここで重視すべきは、『世界の変貌』においては、ア prioriに「ヨーロッパ中心主義」とならないよう、近代ヨーロッパに特有の概念が前面に持ち出されていないこと⁶⁸、19世紀ヨーロッパ史では自明とされてきた政治秩序単位や出来事の意味を、同時代の他の地域を視野に入れて、相対化しようという姿勢が一貫して取られていることである。それゆえに、『世界の変貌』はグローバル・ヒストリーとして成功しており、だからこそ、19世紀は「ヨーロッパの世紀」であったという主張も説得力を持つのである。

3-3. たくさんの賞賛とわずかな批判

本節の最後に、著者自身の言葉と、周囲の評価を手がかりに『世界の変貌』で描き出される19世紀の世界のポートレートの特徴を整理しておきたい。オスターハンメルは、結語として「歴史における19世紀」という節を設け、その特徴を5つの観点からまとめ直す⁶⁹。

第一の特徴として挙げられるのは、「^{アシメトリック}非対称的な効率化」である。効率化が顕著に見られたのは、①経済的な生産性（工業的生産方法の導入とフロンティアにおける土地の獲得に裏付けられる）、②軍事面（新兵器の発明や戦争技術の蓄積、戦費調達と利用方法）、③国家機関による自国住民への介入・統制（徴税・徴兵・学校・福祉制度などの展開）の3つの次元においてである。これらの効率化は相互に関連してはいるが、必ずしも一方が他方の必要十分条件ではなく、3次元での効率化が同時にかつ模範的に展開されたのは、ドイツ、フランス、日本の3国のみである。にもかかわらず、全体としてみればヨーロッパ、アメリカ合衆国、日本が他の国や地域に比べて不均衡に効率化し、帝国主義の展開に寄与することになった。

第二の特徴は、「^{モビリティ}流動性」である。とりわけ19世紀のモビリティの新しさは、①移民による人間の流動化の飛躍的増大、モノや情報、そして資本の流動化の高まり、②移動や循環全般における加速、③インフラストラクチャーの整備による流動性の基礎づけ、の3点に見られる。

第三の特徴は、「非対称的な参照系の濃密化」、つまり、世界中の知識人たちが外国や自らの文化圏の外に目を向け、そこの理念や文化コンテンツを翻訳や外遊などを通じて積極的に摂取

⁶⁶ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 603-672. なお、オスターハンメルは2003年に『世界の変貌』の構想とみなしうる英語論文を発表している。そこでは19世紀の特徴が6点に要約され、そのうちの1点として、19世紀が国民国家の時代ではなく、旧来の帝国（ハプスブルク、オスマン、ロマノフ）と、新しい帝國的国民国家の時代であることが簡潔に主張されている（J. Osterhammel, In Search of a Nineteenth Century, in: *GHI Bulletin*, No. 32 (2003), pp. 9-28, p. 21 f.）。

⁶⁷ 例えば、「[本書は]豊富な素材[の提供]にもかかわらず、網領的にはまったく明確にならないままである。[...]まるで、目を閉じた顔を見ているようだ。シワの一本一本、毛穴の一つ一つまで見分けられるのに、その皮相の奥は見えない」と評される（Dirk Pilz, Das Zeitalter des Einzigartigen. Ein Epochenporträt im Weltgeschichtsformat: Jürgen Osterhammels „Die Verwandlung der Welt“, in: *Berliner Zeitung*, 07.05.2009）。

⁶⁸ 例えば、各章の標題もかなり普遍性をもつものである。註17参照。

⁶⁹ Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 1279-1301. 著者は明記していないが、5つの特徴として挙げられている事象の具体的内容は、それぞれ本論の別の場所で立ち入った考察がなされている。

するようになったことである。19世紀に顕著だったのは、①摂取量が増えたこと、②参照先が「西洋」に一極化され、世界中で西洋が文化の参照基準となったこと、である。それは、中国の「中体西用」、明治日本の「欧化政策」などの例からも想像されるとおり、「文化帝国主義」といった概念では捉えきれない複雑な関係であるが、全体としてみると、実践面における文化の伝播は西洋から西洋外への一方通行であった。

第四の特徴は、「平等とヒエラルヒーの間の緊張」、すなわち、19世紀には、法の前での個人の平等という原理の確実な浸透傾向が見られた一方、例えば国家間のヒエラルヒーは前後に例がないほどに明確に固定化された。

そして、19世紀の第五の特徴として挙げられるのは「解放」である。平等の真の実現はさておき、より多くの自由や同権に向けた解放——黒人奴隷、農奴、労働者、一定の留保付きで女性の解放——に向けた動きは見紛うことがない。

オスターハンメルが描き出すこうした19世紀の世界の肖像は、多くの賞賛の声とともに受け入れられることになった。学術研究書としての『世界の変貌』への高い評価は、2010年にドイツ学術振興会（DFG）から「ライプニッツ賞」が授与されたことに端的に見て取れる⁷⁰。さらに、文化面が充実していることで有名な北ドイツ放送（NDR）は、2009年の実用書最優秀賞を『世界の変貌』に授与した⁷¹。これらは、オスターハンメルが持つ説得力の証左と言える。

歴史家や文芸ジャーナリストたちの『世界の変貌』への評価も高い⁷²。ユルゲン・コッカ（1941-）、フリードリヒ・レンガー（1957-）、アンドレアス・ファーマイア（1969-）といった各世代を代表するドイツ近代史家たちも口々に、「彼の浩瀚な、しかし非常に読みやすい19世紀の世界史は、ドイツの歴史叙述の一里塚であり、ここ数十年で最も重要な歴史書の一つであり、大成功作⁷³」であるとか、「[本書は] 疑いなく21世紀のドイツ語圏の近代史家によるこれまでで最も意義深い業績⁷⁴」であるとか、「点描画法のような観察が、洗練されたやり方で分析へと凝縮される本書の核心は、知的なきらめきのみならず多大な読書の喜びを提供している⁷⁵」などと賞賛する。もちろん、狭義の文化（芸術やスポーツ）についての言及がほとんど見られない、あるいは全体としてイギリス帝国を高く評価しすぎであるといった類の「難点」は指摘される。しかし、論評者たち自身も、そうした指摘がオスターハンメルが実践した19世紀のグローバル・ヒストリーの前では些細な難癖に過ぎないことを承知しているようだ。著者自身は、『世紀の変貌』が多くの信頼に足る先行研究の渉猟から生まれたことに鑑み、同様の挑戦の可能性を示

⁷⁰ ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ賞（通称「ライプニッツ賞」）は、ドイツで最も賞金額の大きい学術奨励賞。参照：http://www.dfg.de/gefoerderte_projekte/wissenschaftliche_preise/leibniz-preis/index.html。

⁷¹ 参照：<http://www.ndr.de/ndrkultur/sachbuchpreis/historie/index.html>。

⁷² 個々に明記したもの他、ドイツ語圏の主だった新聞やオンライン書評（*Süddeutsche Zeitung*, *Neue Züricher Zeitung*, *Die Welt*, *Der Tagesspiegel*, *Frankfurter Rundschau*, *Glanz und Elend* 等）の書評を参照。

⁷³ Kocka, *Die erste Globalisierung*（註24参照）。

⁷⁴ Friedrich Lenger: Rezension zu: *Osterhammel, Jürgen: Die Verwandlung der Welt. Eine Geschichte des 19. Jahrhunderts. München 2009*, in: *H-Soz-u-Kult*, 13.03.2009.

⁷⁵ Andreas Fahrmeir, *Das Panoramabild eines Jahrhunderts*, in: *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 01.04.2009.

唆もしくは鼓舞しているが、「彼に続く者はほとんどいないだろう、なぜなら、ほとんどのドイツ語圏の近代史家たち（自分も含めて）には、そのための重要な前提が欠けているから⁷⁶」という見解の方が、今のところは妥当に響く。

そうした中で、多少なりと内容に立ち入って論評しているのは、グローバル・ヒストリー研究の自家ともいえるアメリカ合衆国のドイツ史研究者と⁷⁷、ドイツ人のアメリカ史研究者である⁷⁸。前者は、①商業の過大評価／工業化の過小評価、②国民国家（ナショナリズム）の過小評価／帝国（帝国主義）の過大評価、民主主義・共和主義の興隆の過小評価、③ドイツ史を例外とみなす傾向、④とくにアメリカ史に関する細かい事実誤認、を指摘し、後者は、①ジェンダーの視点（とくに身体性やセクシュアリティの問題）が欠如していること、②アメリカの奴隷制を古代ローマの奴隷制の続きとして、また、プランテーションを採算の取れた合理的な経済形態として把握すること、に批判点を見出している。いずれも『世界の変貌』の本質にかかわってくる重要な論点であり、個別のテーマとして議論の展開に道を拓くものであろう。とはいえ、最後にはそれぞれに、「〔本書は〕中欧研究者が自らの知の地平をグローバルに拡大するため、また19世紀のドイツの位置についての新しい印象を得るため」に読まれるべきであり、「出来る限り早くに他の言語にも翻訳されるべき」ものと締めくくっていることから分かるとおり、オスターハンメルのグローバル・ヒストリーの試み自体は、一つの19世紀史として揺るがない価値を認められている。

4. おわりに

以上に紹介したオスターハンメルの『世界の変貌』は、「19世紀学」研究を展望する上でも、様々な示唆を与えてくれている。

まず、「19世紀」という時間的な枠について。『世界の変貌』が示すとおり、19世紀を、今日の我々が慣れ親しんでいるカレンダー上の100年間に限定せず、また、ヨーロッパ史に引きずられた「長い19世紀」概念に縛られることもなく、1760年代から1920年代にいたる「より長い19世紀」として緩く把握することは、「19世紀学」にとっても生産的と思われる。法制史研究の大家である石井紫郎は、「19世紀学」学会の設立に際して、日本史には19世紀という枠組よりも「19.5世紀」、つまりペリー来航あたりから第二次世界大戦までの100年を一括りにする枠組の方が妥当ではないかという提案をした⁷⁹。こうした日本史の視点も、「より長い19世紀」は受け止める余裕を持つように思われるからである。と同時に、「より長い19世紀」は、「近代」や「モデル

⁷⁶ Lenger: Rezension zu: *Osterhammel* (註74参照)。

⁷⁷ Sperber, Review of *Osterhammel* (註20参照)。

⁷⁸ Norbert Finzsch, „Diligence and accuracy“ – Jürgen Osterhammels *Opus magnum* über das 19. Jahrhundert, in: *Historische Zeitschrift*, Bd. 290 (2010), S. 703-710.

⁷⁹ 参照: 石井紫郎「日本法学の草分けと19世紀の知 – 『國體』と進化論 –」(『19世紀学研究』第4号、2010年、45-64頁)。

ネ／モダニティ」という社会学的概念の一元性や曖昧さとは無関係であることも⁸⁰、その魅力の一つであろう。

次に、「ヨーロッパ」という枠組みについて。『世界の変貌』は、19世紀のヨーロッパの意義をアプリアリに自明とせず、グローバルな検討を行い、結果的にその特殊な位置を明確にした。とくに、19世紀ヨーロッパの知あるいは文化——具体的には、様々な理念や学問、その制度的基盤——が、世界中の準拠枠として一極化したという指摘は、「19世紀学」の出発点とも重なり合う⁸¹。例えば、日本における近代歴史学も、明治政府のお雇い外国人であるドイツ人ルートヴィヒ・リース（1861-1928）の影響の下に始まった⁸²。しかし、21世紀を迎え、世界の中でのヨーロッパの重要性は、19世紀に比べて大きく後退した。グローバル・ヒストリーは、そうした変化への歴史学研究的対応の一つとして登場した。にもかかわらず、「〔グローバル・ヒストリー研究にかかわる〕諸組織、フォーラム、議論などはこれまで通り『西洋』のもの」とみなされてもいる⁸³。事実、『世界の変貌』は、アジアからではなくヨーロッパから生まれ、著者自身も認めるとおり⁸⁴、それは「ヨーロッパ中心主義」的な要素も多分に持つ。「『ヨーロッパ』に帰属意識を持つ人々が『ヨーロッパ』に帰属意識を持つ人々のために歴史を記せば、それはどうしてもヨーロッパ中心史観となる⁸⁵」という指摘は正鵠を射ている。「ヨーロッパ」という概念自体の問い返しがなされない限り、「ヨーロッパ中心主義を批判する人々が、いくらヨーロッパ史の見直しを試みても無駄⁸⁶」、という挑戦的な発言を、「19世紀学」はきちんと受け止めていく必要があるだろう。

最後に、「学問」について。『世界の変貌』は、出版後1年ほどで5刷が出された。大部の——しかも、文字通り飾り気のない——専門書としては、例外的な売れ行きである。歴史家にとっての本書の魅力は、主に前節で取り上げたいくつかの特徴にあると言えるだろう。しかし、本書を手にしたのは、歴史家だけではない。一般の読者層にとって『世界の変貌』が持つ魅力は、何よりもグローバル・ヒストリー自体の面白さと、それを遺憾なく伝えるオスターハンメルの巧みな表現力にあると思われる⁸⁷。グローバル・ヒストリーのダイナミズムは、既存の国家の枠組みを前提とし、それを比較するインターナショナルな思考法に加え、その枠組みを超え、様々なレベルでの関係性を問うトランスナショナルな発想法に由来していると言えるだろう。

⁸⁰ Vgl. Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 1282 f. オスターハンメルは、近代というコンセプトが、常に優先順位を定め、近代性の様々な局面を一例に並べるものであるという。

⁸¹ これについては、「知：増殖、濃縮、分配」という章において詳述される。Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 1105-1171.

⁸² リース研究全般については以下を参照：早島瑛「近代ドイツ大学史におけるルートヴィヒ・リース」（『関西学院商学論究』50-1/2、2002年、565-592頁）；日本滞在中のリースについては：金井圓「歴史学——ルートヴィヒ・リースをめぐる——」（同『お雇い外国人：人文科学』（鹿島出版会 1976年）、107-197頁）。

⁸³ 註43参照。

⁸⁴ Vgl. Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt*, S. 16.

⁸⁵ 羽田「新しい世界史とヨーロッパ史」、45頁。

⁸⁶ 羽田「新しい世界史とヨーロッパ史」、7頁。

⁸⁷ 多くの評者がオスターハンメルの記事力、表現力を賞賛している。文芸的な魅力という意味で、ヴィクトル・ユーゴーの大河小説『レ・ミゼラブル』に匹敵するという評も見られる（Wolfram Schütte, Jürgen Osterhammel: *Die Verwandlung der Welt: Zur Genealogie der Globalisierung*, in: *Titel-Magazin*, 25.01.2010）。

同様にそれは、狭義の歴史学にとどまらず、社会学、政治学、経済学、文学、あるいは外国事情研究、地域研究などに基づく知的関心にも応じる可能性を持つ。そこには、既存の学問の枠組みを前提とした学際性＝インターディシプリナリティにとどまらず、それを乗り越える「トランスディシプリナリー」という概念も見え隠れしている⁸⁸。「19世紀学」も、様々な分野や関心の研究に開かれた学⁸⁹の構築を目指していくべきではないだろうか。

⁸⁸ 「トランスディシプリナリー」概念については、さしあたり以下を参照。ただし、本稿では、厳密な定義の問題ではなく、international/transnational と並行して捉えられる意味での interdisciplinary/transdisciplinary ということを念頭に置いている。Harald Völker, Von der Interdisziplinarität zur Transdisziplinarität?, in: F. Brand, F. Schaller u. H. Völker (Hg.), *Transdisziplinarität. Bestandsaufnahme und Perspektiven*, Göttingen 2004, S. 9-28.

„Study of the 19th Century Scholarship“ – Europa – Geschichtswissenschaft
—— Jürgen Osterhammels *Die Verwandlung der Welt: Eine
Geschichte des 19. Jahrhunderts* ——

Naoko MORITA

Das Forschungsprojekt „Study of the 19th Century Scholarship“, das seit ca. vier Jahren im Gange ist und sich auf der Suche nach einer neueren Richtung der Wissenschaften befindet, hat zwei Prämissen: Zum einen entstanden die Wissenschaften und das Wissenssystem, worauf unsere heutigen Lehre und Forschungen wesentlich basieren, in Europa im 19. Jahrhundert. Zum anderen sind sie aber seit geraumer Zeit ins Schwanken geraten.

Dabei gehört die Aufgabe, Europa im 19. Jahrhundert genauer zu betrachten und zu begreifen, den Geschichtswissenschaftlern, die sich mit dem Projekt beschäftigen. Das von dem deutschen Historiker Jürgen Osterhammel verfasste Buch *Die Verwandlung der Welt: Eine Geschichte des 19. Jahrhunderts* (2009) dient dazu als passender Ausgangspunkt. Die Merkmale dieses Buches sind sowohl formal (Verzicht auf die chronologische Erzählung, panoramaartige Beschreibungsweise sowie die originelle Periodisierung des „längeren“ 19. Jahrhunderts), als auch inhaltlich (erfolgreicher Versuch einer Global History) durch Vergleiche mit der Trilogie der Geschichte des 19. Jahrhunderts von Eric. J. Hobsbawm hervorzuheben.

Daraus kann das „Study of the 19th Century Scholarship“ dreifach Gewinn ziehen: Erstens muss das 19. Jahrhundert nicht streng kalendarisch umgrenzt sein, sondern kann es durchaus länger – von den 1760er bis 1920er Jahren – sein, wie Osterhammel globalgeschichtlich überzeugend begründet. Zweitens ist das 19. Jahrhundert doch als das Zeitalter Europas zu verstehen. Das passt einerseits zu der Prämisse des Projekts, aber andererseits ist es umso wichtiger, sich erneut mit dem eurozentrischen Begriff „Europa“ auseinanderzusetzen. Schließlich sollte sich das „Study of the 19th Century Scholarship“ weniger interdisziplinär als transdisziplinär profilieren, so wie eine gelungene Globalgeschichte mehr transnationale Wechselwirkungen als internationale Vergleiche in den Blick nimmt.